



ひとりひとりに寄り添う医療を

がん医療は近年、目覚ましい進歩を遂げています。新しい薬物療法や放射線治療の開発により、かつては治療困難とされた状況においても、長期生存が可能となる患者さんが着実に増えています。その一方で、治療の過程で患者さんが直面する身体的な苦痛や精神

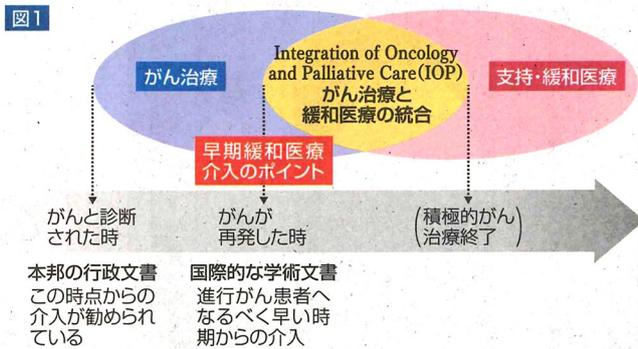


つるた あつし 京都府立医科大学 卒、同大学院修了。米・国立がん研究所、英・ヒートン

ンがん研究所、倉敷中央病院外科部長、川崎医科大学消化器外科学准教授などを経て、2025年4月から倉敷成人病センターに勤務。日本外科学会専門医・指導医、日本消化器外科学会専門医・指導医、日本内視鏡外科学会技術認定医、日本大腸肛門病学会専門医・指導医、日本消化器病学会専門医・指導医、日本緩和医療学会認定医など。

① がん治療とともに「支える医療」

倉敷成人病センター支持緩和医療科部長 鶴田 淳



的なつらさは、今なお看過できない重要な課題です。私は30年以上にわたり、外科手術や

化学療法など、がんを治すことを目的とした医療に携わってきました。その経験を通じて強く感じているのは、治療成績だけでなく「治療を受けながら、どのような時間を過ごせるか」が、患者さんにとって極めて大切だということです。



■支持・緩和医療の必要性
そのために欠かせないのが支持・緩和医療です。支持医療は、治療に伴う副作用を和らげ、体力や日常生活を支える医療であり、緩和医療は、痛みや息苦しさ、不安や抑うつなど、心と体のつらさに寄り添う医療を指します。
これらはがん治療をあらゆる段階で行うものではありません。むしろ、がん治療と並行して早期から取り入れることで、患者さんの治療を続ける力を支え、生活の質を保つ役割を果たします。
■科学的に証明された「早期緩和医療」の有効性
2010年に米国から「早期緩和医療」の有効性を科学的に裏付けた画期的な研究が報告されました。進行肺がん患者に対し、通常のがん治療に早期から緩和医療を併用したところ、不安や抑うつが軽減し、大きく生活の質が改善したのです。
さらに生存期間も延長し、「よりよく生きる」ことがより長く生きることに

つながる可能性が示されました。
■「がん治療と緩和医療の統合」という新しい医療のかたち
この研究を背景に、現在世界で広がっているのが、「がん治療と緩和医療を統合する医療 (IOP: Integration of Oncology and Palliative Care)」です。図1。

がん治療医は手術や抗がん薬、放射線治療を担い、緩和医療医が苦痛や生活上の悩みに寄り添い、診断の早い段階から協力して患者さんを支えます。患者さんを中心に、二つの専門性が並んで支えることで、治療効果と生活の質の両立が可能になります。図2。
当科ではこの理念に基づき、病状の進行度にかかわらず、治療の早い段階から緩和医療を実践しています。「敷居は低く、門戸は広く、実行きは深く」をモットーに、患者さんとご家族に継続的に寄り添う医療を提供します。
がん治療医と緩和医療医が手を携えて、「治すこと」と「支えること」を切り離さず、その人らしい時間を大切にできる医療を、これらも提供していきたいと考えています。

倉敷成人病センター(0866-422-2111)